



「只今」の夢

硯山人

香ひる

或村の百姓家に作藏と云ふ男の子がありました。  
 此子は誠に可愛らしい、よい子でありました。唯  
 一つ不思議な事にはお父さんがお呼びになつても  
 お母さんが御用をお仰つてもいつも氣嫌よく「ハ  
 イ」と返事をしながら容易に行きもせず爲もしな  
 いで自分の勝手な事をして遊んで居ると云ふ不精  
 な子供でした。  
 或日唯のことお母さんが臺所から納屋の前に遊ん  
 で居る作藏を呼びかけて  
 母作藏や、御苦勞だがね山へ行つて松葉を一抱  
 持つて来てお呉れよ」とお仰つた。  
 スルト作藏は例の通り機嫌よく

「作、ハイ、只今！」と然も快地よく大きな聲で  
返事はしたが、サテ一向行き出さないそして相變  
らず自分勝手な遊びをして頻りと蟻の行列を眺め  
て居ました。其中に之も倦きたので裏の畑から向  
ふの小川へと出掛けて目高を逐つかけて遊んで居  
ましたのでもうお母さんの御用などはすつかり忘  
れてしまいました。

其中に日は段々高くなつてお正午も過ぎた様な  
で、お腹は飢つて来る、暑くはなつて来たもので  
すから家へ歸つて見るとお家はからつぽ、お父さ  
んもお母さんも野畑へ行つて居ない。戸棚を開け  
て見るとお香の物が皿の上に乗つて居た。先づ  
之を持ち出してそれからお茶碗にお箸と次にはお  
櫃とを出して漸く御飯を濟ませてしまいました。が  
さて是から何うしたものか、何をして遊ばうかな  
隣の吉ちやんの處へ行かうかしらなど、考へて見  
ましたが根が不精の作藏ですから勢よく出掛も  
しないで柱に寄りかゝつて考へて居ましたスルト

何處からともなく二三人の子供が何かべチャクチ  
ヤ云ひながら家の前を通る様子です。誰が来たの  
か知ら吉ちやんならいゝがそれにしても聞きなれ  
ない聲だと思つて居ると

「甲、オイ、今行くよサン、此處の家を御覽ん  
よ此處がネ、只今、」と云ふ子供の家だよ、のぞ  
いて見様か只今が居るかも知れないから」  
今行くよ「ア、ソー？此處かへ、大層立派な家だね、  
それはソーと只今が居たら連れて来いと大王様が

おしやつたんだから居たら連れて行かうぢやない  
か、ネ今直サン」

今直「ア、ソーしやう、やわ居る、今行くよサ  
ン御覽よ只今が柱に寄りかゝつて寝て居るよ丁度  
いゝから早速連れて行く事にしやう」

と二人の妙ちきりんな名前の子供がヅカ、と入  
つて来て何をするかと思ふと蜘蛛の巢の様な糸を  
巻いた糸巻を出して先づ第一に作藏の口を縛つて  
何も云へない様にしてしまつた。それから手と云

はず足と云はずグル〜〜と皆巻き上げてしまつたのでまるで、蜘蛛の巣にかゝつた虻よろしくと云ふ有様で作藏は何うすることも出来ません。

やがて仕度が出来ると二人の怪物はエンヤサと作藏を擔ぎ上げて家を出たかと思ふと風を切る様に飛んで行く様子です、何んでも餘程早く驅けて居る様子ですから何んな處を通るのだらう見たいものだと思ふつて目を開きましたが目前は蜘蛛の巣でさつぱり何が何だかわからない。少しは糸の隙からでも見えそをなものだと思つて頻りに目ばかりをしますけれど巻き付けられた糸が澤山なので隙が出来ない、其中漸く少しの隙間が出来たので一寸下の方を見ると下の々々すうつと下の方に家の屋根や大木の先やらが見えてそれが丁度涼車にでも乗つた時の様に後〜と走つて行く様子です。今作藏は雲の上を風の様に早く飛んで行く處です作藏は見るからにゾットして目も何もつづ

つて縮み上りました。何んでも百里か二百里飛んで来たと思ふ頃二人の怪物は雲から降りて作藏を地べたに下しました。ソット目を開いて見ると大きな岩屋の前です。作藏は何うなることかと心配で怖くて仕方ありませんが聲を出すことも泣くことも出来ませんからちつとして居ると頓がて五人のものが出て来た様子です、

甲 オイ〜今行くよサン、其縛つてゐるのは只今かへ、

乙 僕の級に入れて遣らうか「少し待て」サンが悦ぶよ

丙 ナニ「も少し」サンの組がいよ、あそこには「後で」サンも居るから

なんて話して居ました。何の事やらサツパリ解りません

作藏「誰も〜ナンテまわ不思議な名前だらう」と口の中で云つて居ました。

スルト奥から一人の怪物があはたいしく出て來

て

「オイ皆早くお入りよ、そして只今を教場へ連れてお出でよ、今に大王様が御調べるなさるとさ」と大聲でどなりましたので皆はドヤ〜と岩の中に入り作藏は又もかつがれて暗い〜眞暗なそして寒い様な冷つこい氣持のする氣味の悪い部屋の中へ入れられてしまひました聞くとはなしに聞いて居ると部屋の方の方ではガヤ〜〜大變な騒ぎで今しも何かお稽古の様です。そして向ふの隅の方から大きな雷の様な聲で

怪、オイ、少し待て！貴様の聲は小さいモット大きな聲を出さないと棒だぞ〜とおどかすと小さな可愛らしい女の子の聲で戦へながら

少女「ハイ、大きな聲を出します御免なさい」と云ひながら一層聲を張り上げて

少し待て〜〜〜

と何でも自分の名前を續けざまに讀んで居る様で

す、又向ふの方では大きな聲で之は泣きながら

「直に行きます〜〜〜」

とがなつて居る。其隣りの處では如何にも疲れて困つたと云ふ様風で

「ハイします〜〜〜」

と云つて居る其時不意に

「大王様の御入り……………」と云ふ聲が

聞えるると今迄ガヤ〜〜〜して居つたのが急に森と靜まる、同時に遙か奥の方から重い〜靴の音が地響してツシン〜と遣つて來ました。

頓がて入つて來た人を見ると、夫れは〜大きな人で丈は二階の屋根位迄もあり目はお小皿位の大きさで口は狼の様に耳迄さけて居る實に恐ろしい鬼の様な人です、そして其聲は大雷が一時に落つた様な大きな音で

大王、只今を連れて來たかと聞きましたので作藏は我知らずビクリとしました。

行くよ「ハイ、連れて参りました、此處に縛つて置いて御座います。」

大王「ドレ、調べて遣らう、糸を取つてしまへ」と云ひますと先の二人は出て来て今迄縛つてあつた糸を取つて呉れました。

大王「成る程是は不精そいな顔して居る。怠けものに見えるなと云ひながら作藏の頭を捕へて頭の先から足の先迄見廻はして、

大王「お前はお母さんが御用をお仰しやつた時に何と云つて怠けるかなと云ひました。

作藏は返事をするのもいやですけれど大王が捕へた手の拇指が如何にも痛いので獨りでに口を開いて

作藏「ハイ只今」と申しますと云ひました。

大王「ハハア、そーだらう、夫れだからお前の名は只今と云はれるのだ此處はノンペンガラリの國と云つて何んでも、今直に」とか「今行くよ」とか「只今します」とか「一寸待て」などと云つて置きな

四十八  
から容易に實行しない不精もの丈が集まつて居る國だからお前の様なものが居るには至極よい處だお前はもを家へなど歸らんでもよからう、と云ひました。

作藏は今にも泣き出しそをな顔して

作藏「大王様も是から無精には致しませんから何うぞ母さんの處へ歸して下さい」とお願ひしましたが大王は大きな顔を横に振つて

大王「イヤ、そんなことでは歸せない、お前の爲るゝがわてになるものか、今日は兎に角此處の無精學校へ入學しなければならぬ、そして今日は初めてだから百遍で我慢する、お前の好きな處に立つて大きな聲で自分の名只今を百遍讀め、聲が小さいと幾度でも遣り直させるぞ」と云ひ付けて大王は亦も、ヅシン〜と地響きとして奥へ行つてしまひました。

作藏は不省無精に一つの列の端に立つて泣き聲を張り上げて外の子供と一所になつて

